

積丹町民の足を支える税金

積丹町立美国中学校 三年 西村 栞

私たちの住んでいる積丹町は、人口二千人を切る小さな町だ。そのためバスの本数は少なく、電車も通っていないため、多くの人が自家用車で移動している。私自身ほとんど両親の車に乗って移動しているが、たまにバスを利用することもある。両親の都合で自家用車を使えないときは、よくバスを利用しているため、こういうときには便利だなと思ったし、乗るたびにそのありがたみを感じていた。

そんな中、昨年の九月いっぱいまで民間のバス会社が運営している町内を走るバスの一部が廃止となった。主に、利用者の減少によって採算が取れなくなったという理由からである。廃止を知ったときには、正直これから町内を移動する手段が減るのかと思いい、心配になった。また、このバスは町民だけでなく町外から来る観光客の方々も一部利用しているため、そのような方々も困るのではないかと不安になった。

そんなときに、町が運営する生活交通バス通称「しゃこバス」の運行が決まった。乗車するためには前日までの事前予約が必要となったが、以前より停留所の数が増えたり、運賃も安く設定されたりした。そこで私はふと採算が取れなくなって廃止されたはずのバス路線が、なぜ町によって存続でき、運賃も以前より安く設定できるのかと疑問に思った。

そこで、インターネットで調べたり、両親に尋ねたりしたところ、国民が払った税金の一部がバスの補助金として使われているからということが分かった。私たちバスの利用者が払う運賃だけでは賄いきれない分を支えてくれているのが税金である。そのことを知った私は、税金がいかに大切な存在であるのか気づかされた。

税金が警察署や消防署、道路や橋の整備に使われていることは知っていたが、バスの補助金として使われていることは知らなかった。バス路線の廃止をきっかけに、税金のおかげで、私たちの生活が知らず知らずのうちに支えられていたことを実感することができた。中学生である私たちは、消費税しか払う機会がないが、私が払った税は誰かを支え、誰かが払った税は私を支えてくれている。そう考えると、やはり税金はなくてはならない存在だし、とても大切だと思った。